

「異形態」という事件

国際文化学研究科国際文化学専攻長 教授 川口喜治

大学時代、漢語音韻学講義で「異形態」という概念を知ったとき、ワクワクした感覚にとらわれた。安直にWikipediaで確認すると「同一の形態素であるものがいくつかの異なる形をもって現れるときに、その個々の互いに異なる形を指す」とある。大学時代に教わった定義とほぼ同じである。

私がドキッとしたのは「互いに異なる」という言説であった。それまで私は一般論として、正統（正当）な形態があらかじめが存在し、それがコンテキストによって変容したものを特殊な形態だと考えていた。wikiの挙例を借りれば、助数詞「本」は直前の数詞によって/hon/、/pon/、/bon/に形態変化する。漢和辞典では/hon/を常用の音（音読み）とする。その立場からすると、/pon/、/bon/は「特殊な」音になるのだろう。しかし形態素の視座からすれば三つの音は「互いに異なる」。つまりどれが正統（正当）でどれが特殊であるという考え方にはならない。

自己から見て他者は違っているが同時にそれは他者から見ると自己は違っている。違ったものたちが等価に存在しておりそのものたちの関係性が「異」である。そしてその関係性が張りめぐらされたものが「世界」であり「社会」なのだ。

専攻長としての思いや抱負を書くようにとの、江里理事長からの課題とはかなり異なってしまったが、「異形態」との出会いは現組織（Interculturalstudies）の専攻長としての指針ともなる人生における一大事件であった。「互いに異なる」事象を、文化の視点から、切り捨てずに包括的に取り込み、ふっくらとした教育研究を実践し、その母胎となる組織を如何に協働して運営していくことができるか、決して容易ならざる課題ではあるが、その実現が国際文化学研究科の本学における存在意義だと思う。

